

収量面からみたメイチユウ防除に

ついて

望 月 正 己

メイチユウ防除薬剤を使用形態から考えて、一般に使用容易な粉剤を主体とし、パラチオン剤（ホリドール粉剤）がBHC3%粉剤に比較していかなる効力差を示すかを驗知しようとした最初に、第1化期だけ発生をみる場所を求めてそこで試験を行つた。その結果は無撒布に比して薬剤撒粉群は優れ、中でもホリドールの1.5%，1.0%区は2割に近い収量増加を見、ホリドール0.5%粉剤はBHCの3%粉剤に比して5%の有意水準に於て約15%の収量増を示した。依て、1化期のみの発生地帶では鞘枯時期にあたる6月中旬のホリドール1.5～1.0%粉剤撒粉で有効な結果を期待できると考えられる。しかし、北陸では1化期のみの発生地帶は極めて稀で、多くは1化期が多く2化期の少い発生型を示す地帯が多い。依て、このような地帶での防除効果を驗知するため、ホリドール1.5%粉剤を使用して、各化期とも1回撒粉、2化期は葉鞘變色茎發現期に反當4K応用の方法で別に試験を行つた。試験地は県下3カ所とし、雄山、大江、池田村に設置した。こうして、坪當玄米重、反當玄米容量、千粒重、5g粒數等を調査したところ、千粒重では1化期或いは2化期だけの撒粉区は両化期とも撒粉した区よりも低下傾向になり、中でも、1化期だけの撒粉区に於てこの傾向が強いようであつた。この関係を雄山の調査例から5g粒數を摘出してみると、5%有意水準を以て無

撒粉よりも1化期撒粉の方が多數を示し、上記の結果と一致した傾向を粒數面から示していた。さらに、玄米重や玄米容量から見ると、1化期撒粉は2化期撒粉よりも優れた場合があるがこれらは共に両化期撒粉に及ばない。又、1化期或いは2化期のみの單独撒粉は無撒粉より劣る場合も起つている。雄山の調査例についてみても、5%有意水準で重量及容量が無撒粉より優れているのは両化期撒粉だけである。以上のことから、パラチオン粉剤によるメイチユウ1化期の防除は、環境因子の多少の變動を加味しても、殺虫力、收量に於て從來の農薬よりも優れていることはわかるが、しかし、1化2化ともに発生をみる地帶での1化期のみの撒粉は、時に、無撒粉よりも虫害を増加して減收や品質劣悪をみることのあることは注目すべきところである。2化期に於ける撒粉の効果は、土壤、肥料、耕種その他の面から大きな影響を受けがちで、單獨な優秀効果は消失しがちであつて、このことは2化期多發型の池田、大江村でよくその傾向が現れている。依て、このような発生地帶に於ては1化期に集団防除を徹底させるか、或は、2化期に於ても1化期に於けると同様に撒粉を行うべきで、2化期の発生量に應じてこのことは一層徹底させるべきである。

(富山農試 昭38)